国際探究Ⅰ「研究概論講座」

（日時）　平成２７年８月２８日（金）

（場所）　国際教養大学　Ｄ棟レクチャーホール

（対象）　１年生全員（午前・午後２班編制で受講する）・２年ＳＧＨゼミ生徒１３名

（目的）　見通しのある有効なテーマを設定できるよう、講座とパネルディスカッションを参考にする。

（内容）　夏季休業中の課題シート（テーマ・動機・手法・現時点の情報等を記入する）を実例に，演習やパネルディスカッションに積極的に参加する。

（コーディネーター）　秋葉丈志准教授　国際教養大学

（パネリスト）　大山　明裕　ジェトロ秋田貿易情報センター所長
長濱健一郎　秋田県立大学教授
松渕　秀和　秋田経済研究所所長

（日程）

全日常駐・・・腰山

第１班（ＢＤＦ組＋２年ＳＧＨゼミ生13） ※貸し切りバス３台	第２班（ＡＣＥＧ組） ※貸し切りバス４台
※持ち物と貴重品以外の荷物は教室	※３校時までは通常通り授業
８：２５　教室からバスへ移動	１１：４５～昼食・出発準備（２５分）
８：４５　学校出発	１２：１０　教室からバスへ移動
９：１５　講堂入場	１２：３０　学校出発
９：３０　講座Ⅰ①秋葉准教授の講座	１３：００　講堂入場
１０：３０　講座Ⅰ②Ｐディスカッション	１３：２０　講座Ⅱ①秋葉准教授の講座
１１：２０　講堂退場	１４：２０　講座Ⅱ②Ｐディスカッション
１１：５０　学校帰着	１５：１０　講堂退場
１１：５５　授業	１５：４０　学校帰着
※以下４校時以降授業	※ＳＨＲ後放課

１．講座内容

（１）「研究」というものについて（３０分）

①「問い」と「ゴール」の明確化　　→何を知りたいのか？

②「アプローチ」の明確化　　→どうやってたどり着くか？

・本や資料

・関係者へのインタビュー　→誰に，何を

・現場に入る（参加する，体験する）

・実験する

③「仮説」（見込み）を立てる

（２）演習　実際のテーマを使って，どう研究を進める？何を明確にしていけばいい？（４０分）

①１班（午前の部）テーマ例

○「Ｒｉｓｉｎｇ　Ｒｉｃｅ―稲作農家と飢餓国を秋田こまちが救い出す」

（生徒から）

・飢餓国とはどこを対象にしているのか？

・「救い出す」とはどのような分野でどのようにして救い出すというのか？

（松渕所長）

・稲作農家と言っても様々あるのでひとくくりで「稲作農家」ということはできない

○「捨てられる食料を活用してアフリカの飢餓を救う」

（生徒から）

・どこに，どのように捨てられている食料に絞るのか？

・廃棄対策なのか，予防策なのか？

（長濱教授）

・なぜ捨てられているのか，なぜそういう社会になっているのかも考えてみるとよい

○「日本の食料自給率を上げるには―油脂類・小麦に特化して」

（生徒から）

・自給率の上げ方はいろいろあるが？

・それでどのようなメリットがあるのか？

（松渕所長）

・食料の安全保障についても考えてみる

・どの段階を抑えると廃棄を救えるか（製造８割）ねらいを定めるとよい

（大山所長）

・生産者に聞くことが有効だと思う

（長濱教授）

・日本の食生活のあり方も考えないといけない

②２班（午後の部）

○「もし私がＮＰＯを設立したら―飢餓に苦しむ国をお米で救う」

（生徒から）

・救うの意味の具体化

・飢餓の国とはどこなのか？

・なんでＮＰＯなのか？

○「日本の食料自給率を上げるには何をすべきか」
・どの作物に焦点を？
・作れているものとそうでないものを明確にする必要がある
・食料の安全保障についても考えてみる
（秋葉）
・食料自給率１００％は理想といえるのか？
（生徒）
・理想ではない―今の食生活を維持するのは無理、
・貿易，輸出入を通じてつながっている関係が崩れてしまう
・食生活が偏ってしまう
（長濱教授）
・自給自足とは違うので「自給率」という言葉・定義について考えてみる必要がある
○「秋田の○○（稲作技術，灌漑技術，米）は発展途上国の飢餓に苦しむ人たちのためにどう利用できるのか」
（生徒から）
・環境が適しているかどうかをまず考えてみる必要がある
・なぜ秋田で育つのか，秋田について調べてみる必要がある
・秋田にはそうすることで利益があるのか
（秋葉准教授）
・ＪＩＣＡ等，もうやっている方々に聞いてみては？
（大山所長）
・秋田の交流としてともに発展できる
（松渕所長）
・困っている地域は量が取れる米がほしい，
（長濱教授）
・あきたこまちは皆が食べたいのか？ニーズが本当にあるのか？
・秋田の農業が優れているという先入観を見直すべき

（３）パネルディスカッション（パネリストの話→生徒と質疑応答・意見交換）
（大山所長）
・食料廃棄問題は様々な地球上の問題につながっている
・オーストラリアの水問題，世界の水問題は深刻
・食糧問題飽食と健康問題をからめたテーマ，面白いと思う

（松渕所長）
・食料の安全保障と食料自給率のバランス
・食糧危機，飢餓は本当に訪れるのか，逆の説もある，そこの意識も必要
・秋田の農業の４割は秋田こまちに頼っている　このままでは立ちゆかない
・日本の主食は米がほとんどから今やパンに逆転されている
・県内でも食料のリサイクルやリユースをしている例はある
（長濱教授）
・食の安全性を確保（大量生産の状況から，遺伝子組み換え作物），
・食料生産は持続可能なのか（農業機械・土地の力は資源の輸入に頼っている，砂漠化）
・日本農業，世界の農業の長所短所が様々ある，日本や秋田が一方的に優れているわけではない

（生徒）

１班

・オーストラリアでは当たり前のように水を高額で買っているのか？
・なぜ中国やインドの農業投資の対象がアジアではなくアフリカに？
・米を主食として食べているのはどれぐらいの国々か？米が食料で困っている国々に受け入れられるのか？
・秋田のものだけを食べる日を月に一日，条例で設定してはどうか？

２班

・飢餓を防ぐ，飢餓国への支援は，自国で作れるような支援と直接的な食糧配給支援，どちらが効果的なのか
・研究を進める上で，役に立たなそうな事は調べないのが効率的なのか？
・外食産業の食料廃棄の規模はどれくらいか？

２．講座を終えて

コーディネーターの秋葉准教授が，生徒の質問や意見を非常にうまく引き出してくださり，三人の有識者との間で，双方向性のある演習・パネルディスカッションとなった。生徒は，途切れなく活発な質疑応答や意見交換を通じて，研究テーマの設定や今後の研究のあり方について，実感的に把握できたようだった。

３．【生徒の振り返りから】

・パネリストの方々の話から自分が思いもよらないような話題や問題の切り口を提供していただき，大変参考になった。講座を通じて，「研究」というものについての考え方が１８０度変わった。
・自分が日本の中にいて感じている，日本の農業や秋田の農業が「よいものだ」という決めつけや先入観をもたないことが大事だとわかった。グローバルに考えるということはそういうことなのだと思う。
・自分なりのゴール、アプローチを定め、そして数学的な根拠を用いるなどして自分の考えをまとめていきたい。そのためにどんな手段を用いて調べていくのかもちゃんと考えておきたい。
・研究をして自分のイメージ通りにいかない結果が出たとしても素直な結果を書き、ＮＯ！でよいということです。研究では最終的に良い結果が出るまでやるものなのだと思っていたので私は衝撃を受けました。ＮＯ！という結果も素晴らしい研究の結果だと聞いたので、どんな結果になるかは恐れず、自分が立てた問いを納得がいくまでとことんつきつめ、自分なりの答えを出せるように今から情報を収集していきたい。
・大学でも役立つ研究の進め方についてのお話で、ゴールとアプローチを明確化することが大切ということを知りました。私は今まで何となくぼんやりとしたテーマしか考えておらず、アプローチも本

かインターネットの二択しか浮かびませんでした。ゴールを明確化し、よりはっきりとしたテーマを設定すること、アプローチの方法は本かインターネットだけでなく、インタビューやアンケート、実験などの様々な方法があることなど、今後のＳＧＨ活動に活かしていけそうなことをたくさん知ることができました。